【カミラ】
「おはようございます、若様。今朝もいいお天気ですよ」

【カミラ】
「モーニング・ティーの準備をいたしました。こちら、先日奥様がお選びになったダージリンのファーストフラッシュでございます」

【カミラ】
「お茶を飲みながらではございますが、本日のご予定を説明させていただきますね。朝食の後、領地の視察。昼食は外にて」

【カミラ】
「その後(あと）お屋敷に戻られましたら、バイオリンのお稽古の後は旦那様と奥様と会食の予定となっております」

【カミラ】
「ええ、その認識で大丈夫です。それでは、何かございましたら私どもにお気軽にお申し付けくださいませ、若様」

【カミラ】
「それでは、失礼いたします」

◆廊下

【カミラ】
「ふぅ……若様、今日も元気そうで何よりだわ。旦那様たちとの会食も楽しみなようだったし……」

【カミラ】
「にしても、起きてすぐの少し寝ぼけたお顔はとても愛らしかったなぁ……」

【カミラ】
「若様に付いているメイドはたくさんいるけれど、あのお顔を拝見出来るのは私の特権なのよね。ふふっ……」

【カミラ】
「と、ゆっくりしてる場合じゃないんだった。旦那様に呼ばれていたんだから、早く行かなくちゃ」

◆主人公の父の部屋

【カミラ】
「失礼いたします、旦那様。カミラでございます」

【カミラ】
「いえ、若様は今日もお元気でいらっしゃいました。それで、ご用とは……？」

【カミラ】
「……えっ？　しばらく首都に滞在されるのですか？
なるほど……国王様の招集がかかったのですね」

【カミラ】
「はい。旦那様が不在の間、屋敷は私たちにお任せ……
って、えっ！？　メイドや執事も一緒に首都へ行くのですか！？」

【カミラ】
「屋敷には……私と、若様だけ……！？……はっ。も、申し訳ございません。突然の事で、驚いてしまって……」

【カミラ】
「かしこまりました。旦那様方が留守の間、若様の事はこのカミラにお任せください！」

◆廊下

【カミラ】
「……び、びっくりした。まさか若様と２人きりになるなんて。少しの間とは言え、緊張しちゃうな……」

【カミラ】
「でも、これって逆にチャンスかも。いつもは私以外のメイドも若様のお世話をしているけど、全部私が出来るって事だ」

【カミラ】
「…身分差なんて知らなかった頃から、ずっと若様の事が好きなんだもん。やっぱり私、もっと若様に近付きたい」

【カミラ】
「若様はいつか良家のお嬢様とご結婚されるだろうし、恋人になんてなれるわけないけど……せめて、メイドとしては１番に……」

【カミラ】
「っ……もちろん、業務は忘れずに、だけど！」

【トラック２】

◆邸の外

【カミラ】
「それでは旦那様、いってらっしゃいませ」

【カミラ】
「……行ってしまわれましたね。その、若様。私１人では何かと頼りないかもしれませんが、何でもお申し付けください」

【カミラ】
「カミラは幼い頃からずっと、若様だけのメイドでございます。例え１人であろうとも、若様のお世話は完璧にこなしてみせます」

【カミラ】
「……ふふ、お気遣いありがとうございます。ですが、大丈夫ですよ！洗濯物や食事は２人分ですし」

【カミラ】
「と……すみません、若様は今日もご予定が詰まっておりましたよね。まずは領地の管理に関する書類の閲覧から……」

【カミラ】
「私は洗濯をしておりますので、何かございましたらお気軽にお呼びください、若様」

◆キッチン

【カミラ】
「よし、これでご飯は大丈夫そう」

【カミラ】
「……ふぅ。２人きりって知った時は緊張しちゃったけど、いざ始まってみると意外と何とかなるみたい」

【カミラ】
「そもそも、若様には若様の、私には私のお仕事があるし……普段だって、専属メイドと言ってもずっと一緒なわけじゃないもんね」

【カミラ】
「……」

【カミラ】
「でも……せっかく他のメイドがいないんだから、普段は出来ないようなお世話もして差し上げたいな……」

【カミラ】
「って言っても、普段は出来ない事ってなんだろう？
食事の準備も、身の回りのお世話も、普段からやってるし……」

【カミラ】
「……っと、そろそろティータイムのお時間だわ。紅茶と……お菓子は何にしようかしら……」

◆主人公の部屋

【カミラ】
「失礼します、若様。紅茶とお菓子をお持ちいたしました」

【カミラ】
「僭越ながら私の方で茶葉を選ばせていただきました。今日はアッサムですので、ミルクティーでお召し上がりください」

【カミラ】
「その……やはり、お仕事は大変でいらっしゃいますか？いつもは旦那様がほとんどしておられる事ですし」

【カミラ】
「ですよね。ですがその、私は……お辛い時はお辛いと、言っていただけたら嬉しいです」

【カミラ】
「ただでさえ、若様は普段からお稽古やお勉強を頑張っていらっしゃいますし。こんな時くらいは気を抜いてもいいのかな、と……」

【カミラ】
「……申し訳ございません、出過ぎた事を申しました。非礼をお許しください、若様」

【カミラ】
「紅茶が入りましたので、私はこれで失礼いたしますね。その……お仕事も大事ですが、休憩はしっかり取ってくださいませ」

【カミラ】
「それでは、またお食事の際に伺います」

【カミラ】
「はあ……私ったら、つい余計な事まで言ってしまった……」

【カミラ】
「若様、慣れない仕事に取り組んでとても疲れているみたいだったから……」

【カミラ】
「旦那様だって、これを機に若様に領主としての仕事を学ばせようとしているんだろうし、取り組むのは大事って解ってる」

【カミラ】
「でも……いつもより疲れているのがバレバレなんだもの。せめて何か、若様の疲れを取る方法があるといいんだけど……」

【カミラ】
「そうだ、洗濯物を干し終わったら書庫に行ってみようかしら。確か、民間療法の本があったはず……」

◆主人公の部屋前

【カミラ】
「若様、お休み前に申し訳ございません。少しお時間を頂戴してもよろしいでしょうか？」

【カミラ】
「本日は領主代行のお仕事、お疲れ様でした。初めてで慣れない事もあり、とてもお疲れかと思い……」

【カミラ】
「その、私の判断で申し訳ないのですが、少しでも若様がリラックス出来るようにこちらをお持ちいたしました」

【カミラ】
「アロマキャンドルです。お休みの際にアロマの匂いを嗅ぐと、とても落ち着く事が出来ると本で読んだんですよ」

【カミラ】
「では、こちらに置かせていただきますね。……それから、ええと……もう１つ、よろしいですか……？」

【カミラ】
「他にも本で読んだ事があって……実は、ハグをするとストレスが消えて、更にリラックスする事が出来るそう

なんです」

【カミラ】
「私にもハグくらいなら出来るかな、と……いかがでしょうか？　よろしければ……」

【カミラ】
「ふふ……ありがとうございます。それでは先にアロマキャンドルに火をお点けしますね」

【カミラ】
「……では、失礼します……」

【カミラ】
「……っ」

【カミラ】
「（若様の身体……昔よりすごく大きくなって、逞しい……ずっとお側にいたけど、分からない事ってあるのね……）」

【カミラ】
「……」

【カミラ】
「……い、いかがでしょうか？リラックス……出来そうですか？」

【カミラ】
「なら……良かったです。アロマキャンドルの香りがもう少し広がるまで、このままハグをさせていただきますね」

【カミラ】
「……」

【カミラ】
「（あ……若様の心臓の音……少し速いような気もするけど……緊張していらっしゃるのかしら……）」

【カミラ】
「（だとしたら、リラックスとは逆の効果が？でも……若様はこれで良いと仰ってくださったし……）」

【カミラ】
「……ふふ」

【カミラ】
「（何だか私の方が得してしまっているような気もするけれど……もう少しだけ、このままで……）」

//時間経過・翌日

◆カミラの自室にて

【カミラ】
「アロマキャンドルの効果か、それともハグの効果か……今日の若様、何だかスッキリした顔をされていらっしゃる」

【カミラ】
「お仕事も捗っていらっしゃるみたいだし……今日も何かして差し上げようかしら。ええと、昨日読んだ本の中に……」

【カミラ】
「ん……これが良さそう。アロマキャンドルも新しい物を出して、もっと若様にリラックスしてもらいたいな」

【カミラ】
「……私に出来る事なんて限られているけれど……お忙しい若様の心の拠り所になれるなら、それで……」

◆主人公の自室

【カミラ】
「お疲れ様です、若様。その……よろしければ、今夜もお休みの前にお時間をいただければ嬉しいです」

【カミラ】
「あ……アロマキャンドル、良かったですか？ならお持ちした甲斐がありました。今日は香りを変えてみました

よ」

【カミラ】
「昨日のはローズの香りだったので、今日はラベンダーの香りにしてみたんです。若様の好みに合うと良いのですが……」

【カミラ】
「それから、もう１つ……昨日はハグをさせていただいたのですが、今日は違う事をさせていただこうかと思いまして」

【カミラ】
「こちらの耳かきを使って、若様のお耳のお掃除をさせていただこうかと。こちらも本に書いてあったんですよ」

【カミラ】
「ふふ、ありがとうございます。ええと……それでは私、ベッドに失礼いたしますね。若様はこちらに頭をお乗せください」

【カミラ】
「わ、私の太もも、硬くはありませんか？　な、なら良かった……です。それでは、失礼して……」

【カミラ】

「ん……若様のお耳、こうして見ると……すごく、大きいのですね……私の耳よりも大きくて……」

【カミラ】
「では、ゆっくり耳かきを入れていきますので、痛かったらお申し付けくださいね。……ん、んっ……」

【カミラ】
「かり……かりかり……かりかり……こんな感じ、でしょうか……？　強さは……ちょうどいいですか……？」

【カミラ】
「あ……では、もう少し強くさせていただきます……んっ、ん……かり、かりかり……かりかり……」

「んっ…はぁ、ふぅ…んん…。ふっ…はぁ、んん…ふぅ…」

【カミラ】
「若様は……ご自分ではあまり耳かきはされませんか？あ、いえっ……汚れが溜まっているというわけではなく……！」

【カミラ】
「なんだか、慣れていらっしゃらないご様子でしたので……」

【カミラ】

「ああ……確かに、耳かきはお部屋に置いてありませんでしたね。もしご入用でしたら、後ほど新しい物をお持ちします……」

【カミラ】
「でも……もし、若様さえよろしければ……これからも、私が若様のお耳をお掃除させていただきたいです……」

【カミラ】
「ふふ……では、約束ですよ？　私だけにお申し付けくださいね？」

「んっ…はぁ、ふぅ…んん…。ふっ…はぁ、んん…ふぅ…」

【カミラ】
「……と、右のお耳はもう大丈夫そうですね。次……左のお耳をさせていただきますので、頭をぐるっと回していただけますか？」

【カミラ】
「ひゃ……っ！　あ……す、すみません若様……ふふ、少しくすぐったく……！」

【カミラ】
「し、失礼いたしました。それでは改めて、左のお耳をお掃除させていただきます」

【カミラ】
「ん……かり、かり……かりかり……かり、かり……んん……」

【カミラ】
「あ……ちょっと、慣れてきたかも、です……耳かき……もう少し、奥の方まで入りそう……」

【カミラ】
「若様……入れても……いいですか？」

【カミラ】
「分かりました……では、ゆっくり……奥の方、触っていきますね……」

【カミラ】
「んっ……ん、んん……？　この辺……ん、んん……かり、かり……かりかり……かりかり……」

【カミラ】
「あ……引っかかって……この奥、少し……強く、いたしますね……ん、んっ……んっ……」

【カミラ】
「耳の奥の……深いところ……若様、気持ち良いのでしょうか？　先ほどから、拳に力が入っておりますので……」

「んっ…はぁ、ふぅ…んん…。ふっ…はぁ、んん…ふぅ…」

【カミラ】
「ふふ、良いところはそう言っていただければ嬉しいです。その……これからも若様のお耳をお掃除させていただきますし……」

【カミラ】
「参考、というか……せっかくお世話させていただくのであれば、もっと若様に気持ち良くなっていただきたいから……」

【カミラ】
「分かりました。ではここ……もう少し、強くしてしまいますね……」

【カミラ】
「ふっ……ふっ、ふ……ん、ん……ぐ、っ……かり、かり……かりかり……かりかりっ……かりかりっ……」

【カミラ】
「最後にお耳の手前のところもお掃除いたしますね。かりかり……かりかり……かりかり……」

「んっ…はぁ、ふぅ…んん…。ふっ…はぁ、んん…ふぅ…」

【カミラ】

「あ……そういえば、本には……最後に……」

【カミラ】
「ふーーーーーーーーっ……」

【カミラ】
「わわっ、すみません……！　くすぐったかったでしょうか？　本に、最後に息を吹きかけると良いと書いてあったので……」

【カミラ】
「か、かしこまりました。悪くないようでしたら次も、こうさせていただきますね……」

【カミラ】
「……それでは若様、私は失礼いたします。今夜もゆっくりお休みくださいませ」

//時間経過・一週間後

【カミラ】
「あっと言う間に１週間が経ってしまった……明日の夜にはもう、旦那様たちがお屋敷に帰ってくるのよね……」

【カミラ】
「この１週間、若様に少しでもリラックスしていただき

たくて色々な事を試してきたけれど……効果は、あったのかしら……」

【カミラ】
「若様はお優しいから……私の顔を立てようと、本当はそこまででもないのに受け入れてくださっていた、とか……」

【カミラ】
「……」

【カミラ】
「……ダメよ、カミラ。今日が若様と２人きりで過ごす最後の夜なのに、こんな事を考えては」

【カミラ】
「私に出来る事は、最後まで若様に安らかに過ごしていただく事！　頑張らないと……！」

◆主人公の部屋

【カミラ】
「失礼いたします、若様。本日分のアロマキャンドルをお持ちいたしまし……、……若様？」

【カミラ】
「若様……どうか、されましたか……？」

【カミラ】
「……以前にも申しましたが、私は若様に辛い時は辛いと仰っていただきたいです」

【カミラ】
「例え若様が何に悩み、苦しみ……辛いと思っていたとしても……カミラは若様の味方でございます」

【カミラ】
「若様が辛い時に、その辛さを分けていただきたいんです。私には、それくらいしか出来ませんから……」

【カミラ】
「ですから……どうか私に打ち明けていただけませんか？　アロマンキャンドルを焚きながら、お話を聞かせていただきますので……」

【カミラ】
「……なるほど。明日、旦那様が戻られて……若様の仕事を評価なさる事に緊張してしまっていたんですね」

【カミラ】
「その……私はただのメイドで、若様のように領地の事には詳しくありませんし、学も足りないと思いますが……」

【カミラ】
「それでもこの一週間、若様は領地のために奮闘されていたと思いますよ」

【カミラ】
「書類は全て目を通されていましたし、領地の視察から帰ってきた時は、とても明るい表情をされていらっしゃいました」

【カミラ】
「それは、領民と上手くコミュニケーションが出来たからですよね？　旦那様と一緒ではなく、若様１人のお力で……」

【カミラ】
「領民たちも皆、若様が領主を継ぐ事を望んでおります。それくらい、若様はきちんと仕事が出来ていたのですよ」

【カミラ】
「もちろん私も……若様が領主となるのが楽しみです。ずっとこの屋敷で働きたいと思うのは、若様がいらっしゃるからです」

【カミラ】
「ふふ……いいですよ、若様。今この場にはカミラしかおりません。涙を零しても、誰にも言いませんから」

【カミラ】
「これも本で読んだのですが、泣く、という事は悪い事ではないそうです。泣く事でデトックス効果を得る事が出来るのだとか……」

【カミラ】
「……そうだ、明かりが点いたままでは少し恥ずかしいですよね。少し待っていてください……」

【カミラ】
「どうですか？　暗くしたので、私も若様のお顔はよく見えません。それに、ベッドに入ってしまえば声も小さくなるでしょう？」

【カミラ】
「……え？私も、一緒に……？　……ええ、もちろんです。若様がお眠りになられるまで、お傍にいさせてください」

【カミラ】
「……ふふ。２人でベッドに入ると、温もりが伝わってくるような気がしますね」

【カミラ】
「若様の不安が消えるよう、またハグをしても良いですか？」

【カミラ】
「ありがとうございます。それでは……」

【カミラ】
「ふふ。カミラは誰にも言いません。ですから、たくさん泣いて、ゆっくりお休みになってくださいね」

【カミラ】
「ん……」

【カミラ】
「（前よりも力強く抱き締められてる……なんだか若様に縋られているみたい。……そうだ、もっと背中をさすってあげよう）」

【カミラ】
「昔、風邪を引いて眠れなかった時……母がこうやって背中をさすってくれたんです。背中が温かくなって、リラックス出来て……」

【カミラ】
「辛いとか、苦しいとか……そういう事を全部吐き出しても、楽観的になるのは難しいと思います。でも……」

【カミラ】
「分かち合う事は、出来ますから。若様の辛さを、私に

も背負わせてください。私は……若様のメイドです。そう、させてください……」

【カミラ】
「……はい。何があっても、私は若様にお仕えいたしますよ。若様がお求めになるのなら、いつだってこうして背中をさすります」

【カミラ】
「ハグも、耳かきも……い、一緒に眠る、のも……若様のためなら、いつだって……」

【カミラ】
「……ですから、安心してお休みください。カミラはずっと、若様のお傍におります……」

【カミラ】
「……」

【カミラ】
「ん……」

「ん…はぁ…。ふぅ…はぁ…。スゥ…ん、ふぅ…。

んん…。はぁ…、んんぅ…はぁ…ふぅ…。ん…はぁ…ふぅ…。

スゥー…はぁ…。ふぅー…。はぁー…。スゥー…はぁ…。ん

っ…う。」

【カミラ】
「（若様、お眠りになられたのかな？　寝息が胸に当たって、ちょっとくすぐったい……でも、なんだか嬉しいな）」

【カミラ】
「（当たり前だけど、若様は未来の事を考えてとても苦しがってるんだよね……少しでも、私が支えられたらいいのに……）」

【カミラ】
「（こうやって若様と２人で過ごすのは今日が最後だけど……これからも、若様をリラックスさせてあげたいな……）」

【カミラ】
「……ふぁ、ふ……んん……私も、眠くなってきちゃった……、……おやすみなさい、若様……」

「スゥー…スゥ。スゥー…スゥー…。ん、ンンぅ…。スゥ、スゥ…。ん、スゥー…スゥー…。
スゥ、スゥ…んっ…わか、さま…。んん…スゥー…はぁ。スゥ。スゥ。んっ…んぅ…」

【トラック３】

【カミラ】
「ん……ふぁ、ふぁあ……あれ？　ここ……、……」

【カミラ】
「……そうだっ！　昨日、若様と一緒に眠って……！　若様……は、まだ起きていらっしゃらないみたい……」

【カミラ】
「早く朝食の準備をしないと……でも、その前に……」

【カミラ】
「……若様。若様、起きてくださいませ。朝でございますよ」

【カミラ】
「おはようございます、若様」

【カミラ】
「よく眠れたようで何よりです。その……メイドの身でありながら、主人と共に眠ってしまい、大変申し訳ございません」

【カミラ】
「ですが、昨晩私が申した事は本心です。私は若様のメ

イド……いつまでも、貴方様に仕えると心に決めております」

【カミラ】
「若様がお辛い時は、いつでも私を頼ってください。私だけは、若様の弱音を受け止めますので」

【カミラ】
「……ありがとうございます。若様に頼っていただけるのが、カミラにとっては何よりの幸せでございます」

【カミラ】
「ふふ、朝から出過ぎた事を申してしまいましたね。すぐに朝食の支度をして参りますね」

【カミラ】
「夜には旦那様たちが戻られます。……若様も、私が特別に『お世話』させていただいた事は、内緒にしてくださいね？」

【カミラ】
「もちろん、私も若様へのお気持ちは胸の奥にしまっておきますから」

【カミラ】
「……それでは、若様。本日もどうぞ、よろしくお願いいたします」